

ジェンダー史学会公開シンポジウム

“New Woman”の記憶——100年前の「new（新しさ）」を比較再考する

【日時】2010年6月12日（土） 14:00～17:30

【場所】甲南大学岡本キャンパス 5号館1階511教室

【シンポジスト】

◆司会進行 北原恵（大阪大学）

◆報告者

牟田和恵(大阪大学) 「New Woman／新しい女をめぐる政治」

山内恵（津田塾大学） 「ニューウーマンからニューマザーへの模索
——C・P・ギルマンのジレンマ」

石井香江（四天王寺大学） 「時代を超える〈ノイエ・フラウ〉の挑戦
——ヒルデ・ラートウーシュの足跡をたどって」

◆コメンテーター

井野瀬久美恵（甲南大学）

【企画主旨】

今から100年ほど前、19世紀末の欧米諸国で、そして日本や東アジア諸国に（わずかな時差とともに）登場した、“New Woman”と呼ばれた女性たちを再考する。

彼女たちの何が“new”と認識されたのか。この“new”は、「他者」と遭遇したとき、階級やエスニシティといった別の境界線に直面したとき、あるいはその境界を超えたときにどう変化したのか。また、この“new”は、彼女たちのジェンダーやジェンダー認識とどう関わっているのか。そして、この“new”は、いかに記憶されたのか。

以上の問題を比較ジェンダー史の視点から再考してみたい。

【共催】イギリス女性史研究会

*なお同日11:30からは、共催するイギリス女性史研究会の年次研究会にて、同じテーマで「イギリスのNew Woman」に関する報告がございます。こちらの方も合わせてご参加ください。